

図書館だより ~ 今月のおすすめ本 ~



十二支（えと）の動物たちの生き方事典
加藤迪男（編）

「画竜点睛」「蛇の道は蛇」「猿も木から落ちる」「犬も歩けば棒にあたる」など、十二支の動物たちにまつわることわざを集めた事典。動物ごとに紹介。解説があり、十二支の動物に親しみを感じられる一冊。（東）



大阪アースダイバー
中沢新一

やわらかな砂州の上に築かれた大阪。南方と半島からの「海民」が先住民たちと出会い、商いの都が誕生。考古学の発掘記録やさまざまな地図を組み合わせ、大阪の本当の姿を明らかにする。（西）

詳しくは、東図書館（☎62・0190）
西図書館（☎75・5406）へ。



ドクターTのひとりごと
その⑦ 私が選んだ
舞鶴市 10大ニュース

新年あけましておめでとうございます。年頭にあたり、昨年を振り返り、平成24年の本市の10大ニュースを発表します。本市では平成20年まで10大ニュースを発表していましたが、市民の皆様からの応募が少なく中止した経緯があります。ニュースの選び方は今後の課題として、私は1年の締めくくりとして、発表した方が良いと考え、市役所の13部が選んだ86ニュース（重複含む）から、10大ニュースを決めました。①舞鶴観測史上最大豪雪②新たな中丹地域医療再生計画承認③文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）受賞④舞鶴赤れんがパークグランドオープン⑤大阪発電所再稼働⑥大連市と友好都市提携30周年、「日中友好の翼」が訪問⑦京都舞鶴港と韓国浦項港間でクルーズ客船試験運行⑧本市出身の上田萌さんが世界ろう者卓球選手権大会で3冠達成⑨中学校給食を市内3校で開始⑩第66回全国茶品評会で産地賞1位

今年は市制施行70周年を迎えます。市民の皆様と希望溢れるまちづくりの「夢＝目標」を語りながらその実現に向けて努力し、すばらしい平成25年10大ニュースを報告したいと思います。



ごみブクロウの『エコな生活ホーホー』教えます！

ぬるめのお湯で半身浴がおすすめ！
シャワーを16分間使用すると、浴槽1杯分（約200ℓ）のお湯を使ったことになるよ。浴槽に38～39℃のお湯を張って半身浴すれば、体はぽっかぽか。残ったお湯は洗濯に利用しよう！
▶詳しくは、生活環境課（☎66・1005）へ。



【クイズ】数字で分かるごみのこと。これってなあに？
→ 874^g（答えは16^g）

まいづる花図鑑 77

【マンリョウ】（ヤブコウジ科）
見ごろ12～1月頃



関東以南の山中に生え、観賞用としても栽培される常緑低木。茎は直立し、高さ50～100㎝くらいでまばらに枝を出す。葉は互生し濃緑色で厚く光沢がある。夏、枝の先に小さな白色の花を房状に付ける。果実は球形で赤く熟し、よく目立つ。名前の由来は、「万両」でセンリョウ科のセンリョウ（千両）より実が美しいことから。縁起物として正月の飾りとして使われる。

【協力】
瓜生勝朗 市文化財保護委員（植物分野）

「引き揚げ」の記憶を次世代へ

引揚記念館に展示・保管している海外からの引き揚げやシベリア抑留などに関する1万2千点の資料の中から、今回紹介する資料は「飯盒」です。

一口に飯盒といっても、一般的な形や将校用、二重飯盒などさまざまな種類があり、旧日本軍の装備品について知る上でも、大変貴重な資料です。

飯盒は、本来炊飯道具と食器の機能を持ったものですが、シベリア抑留においては炊飯道具よりも食器としての役割が大きかったようです。食事も米飯などではなく、黒パンや消化の悪い雑穀をおにぎりにしたものや具のないスープが一杯だけの粗末なものでした。それでも、何とか命をつなぐためにひとかけらも無駄にしないように飯盒に入れました。

食器として以外に、入浴や体の消毒などにも飯盒を使用したことが多くの手記に記されています。入浴といっても、飯盒に汲んだ一杯のお湯で体を拭くだけのものでした。

このように飯盒は、抑留者にとって生活を支える大切なものでした。壊れたり、紛失したりしても補充はされないため大切に使用していたようで、現在でも使用できそうな外観からもそのことが伺えます。



当館が所蔵している飯盒には、持ち主の名が刻まれたものが多く見られます。中には持ち主が変わったためか複数の名前が確認できるものもあります。それは祖国の土を踏むことなくシベリアの大地に眠る戦友のものを譲り受けたものであったり、先に帰国する者が、シベリアに残される戦友に贈ったものであったりしました。

ある手記には、シベリアに残される戦友と再び祖国での再会を誓い合い、飯盒を渡したことが記されています。少ない食糧でも食べることで命をつないでほしいとの願いを込めたものでした。この二人は引き揚げ後に再会を果たすことができたそうです。

また、珍しいものでは、同じ収容所にいたドイツ兵の捕虜と交換したという飯盒には、ドイツ語で収容所移動の記録が刻まれており、国境を越えた友情の証として館内に展示しています。

▶詳しくは、引揚記念館（☎68・0836）へ。

広げよう人権の輪 ~ 国が異なっても... ~

世界には、約200の国や地域に約70億人の人々が生活しています。言語や文化、宗教、習慣などは国によってさまざまであり、さらに同じ国や地域間でも民族などによって異なる文化的な背景があったり、話す言葉も違ったりと、世界中に住む人々の間には多くの「違い」があります。

日本で生活する外国籍の住民の中には、文化や習慣などの違いによる偏見や誤解から、アパートやマンションの入居を拒否されたり、賃金や労働時間のことによって日本人と異なる不利益な扱いを受けたりすることもあります。また、戦前からの歴史的な経緯を背景とした外国人差別の問題も、世代交代が進んでも、いまだに残っている現実があります。

日本人でも人によって生活習慣や考え方がさまざまなように、生まれ育った国が異なれば生活習慣や文化が違って当然と頭の中では理解できますが、私たち日本人は言語や文化的な背景が違うことで自ら壁を作ってしまいがちです。今日のように国際化が進展する中で、みんなが気持ちよく暮らすには、積極的に外国籍の住民との交流を図り、お互いを理解し合う努力が大切なのではないでしょうか。

昨年9月に開催した人権講演会の中で、スリランカ出身のにしゃんたさんが「日本では人の話を理解したときに『うん、うん』と首を縦に振りますが、自分の国では、その反対に首を横に振ります。来日して間もないころ、その違いに慣れるのに大変苦労した」という話をされました。

にしゃんたさんは、「違いを楽しみに変えましょう」とも話されていましたが、それぞれの違いを理解し尊重し合うことで新しい発見が出てくるのではないのでしょうか。さまざまな色の花で彩られた庭園が美しく見えるように、習慣や文化の違いが世界を今まで以上に美しく、そして尊いものとして輝かせる、そんな明るい社会を目指していきましょう。

《人権啓発推進室》

